

平成30年6月13日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370534

研究課題名(和文) 複文構成の歴史から見た逆接条件表現の推移に関する研究

研究課題名(英文) Study on the history of usage of adversative conditional expressions in the Japanese language

研究代表者

矢島 正浩 (YAJIMA, Masahiro)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00230201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、逆接条件の歴史を順接条件も含めた複文構成史全体の中に位置づけることであった。主な成果は次の2点である。

(1) 逆接条件史の変化は、構造面において順接条件史と一体的に説明される部分と、それぞれ固有の説明が可能な部分とがある。

(2) 接続辞は、近世後期以降、接続詞的用法・終助詞的用法など複文構成上の位置づけを大きく変える用法を派生し、多用される。それらは上方・大阪語、江戸・東京語のそれぞれの表現指向性に基づいた特徴的傾向を示す。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies the history of usage of adversative conditional expressions in the Japanese language. The two major findings are as follows: (1) adversative conditional expressions are of two types, one that changes syntactically in accordance with copulative conditional expressions and another that changes independently under specific circumstances; and (2) since the Edo Period, conjunctive particles have started being used as connective and sentence-final particles. In such cases, conjunctive particles are used according to the expressional directionality of Kamigata (Osaka) and Edo (Tokyo) languages.

研究分野：日本語学

キーワード：条件表現史 近世・近代文法史 順接条件 逆接条件 談話標識 音読・黙読 近代文体史

## 1. 研究開始当初の背景

条件表現の歴史については、これまでも阪倉篤義・小林賢次・山口堯二各氏をはじめとして、体系的な把握をめざした研究が少なからずなされてきている。それら先学により、各時代の状況把握、さらにその歴史変化の原理の究明がなされ、一定の成果が上がりつつある。

このように概括的に条件表現史が捉えられている現状を受けて、本研究の開始当初においては、次の点を優先順位の高い問いとして考えていた。

- (1) 順接条件史と逆接条件史の一体的把握からどのような複文構成史が描けるか。
- (2) その際、a. 主節に対する従属節のあり方がどう変わるのか、b. 表現の根源をなす発想法にどのような変化が見られるのか、c. 中央語であること地域語であること、あるいは書き言葉や規範言語でのあり方等の言語外的要因が言語変化にどう関与しているのか。

以上の課題解決を目指し、本研究を計画することとした。

## 2. 研究の目的

研究を進める中で、上記(2)の問い(中でもb及びc)については、方向調整を行うことが重要であることが明らかになってきた。すなわち、中央語 vs. 地域語という関係で捉える前に、上方・大阪語 vs. 江戸・東京語という、東西それぞれの地域に根差した言語そのものの特徴を押さえないならぬこと、同時に発想法の「変化」ではなく「相違」を解明する必要があるということである。その点を踏まえ、以下を改めて目的として定めることとした。

- (1) 東西の言語史の特質を解明するために、特に近代語資料の質・量面の不足を補うべく資料整備・検討を行う。
- (2) 順接・逆接を合わせた条件表現史を記述する。
- (3) 複文構成の位置づけから外れる[接続詞][終助詞]としてのそれぞれの用法史を明らかにする。
- (4)(2)及び(3)の分析を、上方・大阪語、江戸・東京語のそれぞれについて行い、東西両言語の違いをもたらず事情について考察する。

以上を通して、東西言語における複文構成の歴史を明らかにする方針とした。

## 3. 研究の方法

上記のそれぞれの目的に対して、次の方法を設定した(以下のナンバーは、2節のものと一致する)。

- (1)【資料整備・検討】 明治末期～大正期に録音された落語を文字化資料として整

備する。言語研究において無反省に中央語(東京語)資料として用いられる現状がある近代小説の資料性を精確に見極める。

(2) 逆接辞・順接辞によるそれぞれの条件節について、文中の機能別に「従属節内の時間性」及び「主節との生起関係」の2点から整理する。両条件節に共通する点、相違する点の分析から全体像を明らかにする。

(3) [接続助詞][接続詞][終助詞]の各用法の形式別使用状況を資料別・時代順に整理する。その際、特に主要部の[接続助詞]と、周辺部の[接続詞][終助詞]との歴史の相違点に注目する。

(4)(2)及び(3)の分析に際してポイントとなるのは、近世後期以降の東西差(上方・大阪語 vs. 江戸・東京語の違い)である。ここに見出される相違が何によって起こるのか、表現の根源をなす発想法が東西の言語でどのように異なるのかについて、他の表現事象の歴史との関連性を視野に入れながら説明を試みる。

## 4. 研究成果

### 4.1. 資料整備・検討 (1)

4.1.1. 「落語」文字化資料の作成について  
〔図書〕 (丸数字は5節の記載に対応する成果根拠である。以下同様)

金澤裕之(2015)『資料・情報』明治末・大正・昭和前期のSPレコード資料一覧 東京落語・大阪落語・演説講演分』『日本語の研究』11-2に記載のある大阪落語51話、東京落語76話の文字化資料を作成した。現在、プレーンテキストを『ひまわり』ver.1.5.3にインポート検索可能な状態にある。さらに、それらを用いて、執筆者13名による次の論文集の刊行を企画した。2018年度中には公刊の予定である(〔図書〕が該当)。

### 4.1.2. 小説文体研究について

〔雑誌論文〕、〔図書〕

近代小説について、条件表現等を指標として、文学研究の知見(特に<語り>論)を取り入れて文体分析を行った。尾崎紅葉や二葉亭四迷などに見られる語法の変異が、どのような<語り>を志向する結果であるのか、具体的に論じた。同時に小説は資料ごとの異なった文体志向に応じた言語選択を行うこと、それを踏まえた言語研究の在り方が検討されるべきであることなども明らかになった。

### 4.2. 主要部の用法史について (2)

#### 4.2.1. 逆接条件史

〔学会発表〕～、〔図書〕

古代語の逆接仮定条件は終止形+トモ、確定条件は已然形+ドモを中心的な用法としていた。中世期には、仮定条件でデモが伸長

し、確定条件では格助詞出自のガが参与することによって全体像が変化する。近世以降は仮定条件ではさらにテモが増え、確定条件では近世期以降にノニ、ケレドモが中心形式として勢力を強める。クセニやニモカワラズなど複合辞的なものの発達はいずれも終止連体形接続の形式に見られる。順接の確定条件で発達する複合辞ホドニ・カラ・ノデ、ダケニ・イジョウ(以上)などもその点では等しく、同傾向を示すものとして捉えられる。

已然形+ドモは、確定条件だけでなく、いわゆる恒常条件も表現していた点で、順接の已然形+バと並行的である。近世以降は、確定条件はケレドモが担い、恒常条件は逆接仮定のテモなどによって表される。恒常条件が、仮定条件の一角に再配置される変化と捉えれば、順接条件で起きた、已然形+バの恒常条件が「確定」性に変化を生じて仮定形+バとなることとまさに重なり合う変化である。

以上のように、逆接条件史が描く変化は、順接条件史と一体的に説明できる。

#### 4.2.2. 順接条件史

〔雑誌論文〕、〔図書〕

近世後期には、主節に対する従属節の位置づけの表現という点に関して大きな転換点を迎える。ナラバ節は、この期に「たならば」の形式で相対テンスを担い得る節となり、タラは、仮定・確定に関わらず主節に先行することを表わす接続辞として一般化する。このように、近世後期に現代標準語の条件表現方法とほぼ同様の姿に至るのである。

以上のことなどを記述しながら、順接・逆接を一体的に捉えた条件表現史を整理するとともに、タリ タル タのテンス・アスペクト形式としての変化、主節に対する従属節史といった構文史上の変化など、広く日本語史の問題と連動しながら捉えるべき事象であることを考察した。

#### 4.3. 周辺部の用法史と東西差について (3) (4)

##### 4.3.1. 総論

〔雑誌論文〕、〔学会発表〕、〔図書〕

主要部で用いられる〔接続助詞〕と周辺部で用いられる〔接続詞〕〔終助詞〕のそれぞれの接続辞史に関しては、変化の大きさ、地域差という点において次の傾向を示す。

〔接続詞〕〔終助詞〕 > 〔接続助詞〕

ここには、発話冒頭末尾では、談話展開の態度や聞き手受容への調節意識が直接現れやすく、話者の性向の関与が見えやすいことが、それぞれの地域特性、また変化の大きさとして現れているものと考えられる。

##### 4.3.2. 〔接続助詞〕史

〔学会発表〕、〔図書〕

上方・大阪語と江戸・東京語の相違に関し

ては、順接条件では西の「タラ一極化」に対して東の「複数接続辞の並列使用」であること、逆接条件では已然形+ド(モ) ガケレドモへの主要形式の推移の遅速が西>東であったこと、逆に講義体や演説などの汎地域言語でこそ多用されたり派生が活発だったりする接続辞があることなどを捉えた。

東西言語で共通して観察されることについての具体的な成果内容は4.2節参照。

##### 4.3.3. 〔接続詞〕〔終助詞〕史

〔学会発表〕、〔図書〕

東西差の観察で取り上げた具体的な言語形式のうちから一部を示すと、次のとおりである。(以下は西 vs. 東の順でそれぞれの代表形式を記す)

〔接続詞〕: 順接仮定条件「ソレナラ vs. ソレデハ」、順接確定条件「ソヤサカイ vs. ダカラ」逆接確定「ケレドモ vs. ダケド」

〔終助詞〕「...ケド。 vs. ...ンダケド。」

以上の形式について、特に近世後期以降の東西資料を対象に調査、分析を行った。順接と逆接とで細部に異なるところも少ないが、基本的な部分は大きくは共通した傾向を示す。そこで、ここでは、逆接確定辞を例として、得られた知見の一部を列挙する。

a. 〔接続詞〕〔終助詞〕のそれぞれ初期段階の発達傾向には、おおよそ次の遅速がある。

江戸・東京語 > 上方・大阪語

b. 〔接続詞〕について

・上方語: 〔接続助詞〕 〔接続詞〕へと移行する方法が中心。

並列性に特徴。頻度は低め。

・江戸語: 「指示詞+断定辞+接続辞」が中心だったが、指示詞を脱落する形式へ。捉え直し性に特徴。頻度は高め。

c. 〔終助詞〕について

・上方・大阪語: 聞き手の受容を意識した表現での付加に特徴

・江戸・東京語: 話し手本位に述べる表現での付加に特徴

##### 4.3.4. 東西差の意味について

〔雑誌論文〕、〔学会発表〕、〔図書〕

前節に示すような各形式の選好傾向の東西差は、以下の表現指向性との関係の中で捉えられるのではないかという仮説を得た。

・上方・大阪語: 〔共有指向性/説明・打診型〕(「発話の場は聞き手とともにある」)

・江戸・東京語: 〔一方指向性/主張・提示型〕(「自分の認識・意向をわからせよう」)

上記の仮説は、他の東西で選好傾向が異なる諸形式の状況を踏まえて得たものである。

仮説に基づき、該当可能性のある表現形の使用の偏差を改めて見出しながら、そういった把握から外れた選好傾向を示す表現形に共通する要素について検討することを通して、今後も検証を重ねていく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 10 件)

・矢島正浩「タラ節の用法変化」『国語国文学報』, 査読無, 76, 2018 年, pp.15-31

・揚妻祐樹「言文一致体」『日本語学』, 査読無, 36-12, 2017 年, pp.28-37

・揚妻祐樹「偶然確定条件から見た二葉亭四迷の文章」『藤女子大学国文学雑誌』, 査読無, 96, 2017 年, pp.1-19

・矢島正浩「連用形+ンカの用法が示す近世後期上方語の表現指向」『国語国文学報』, 査読無, 74, 2016 年, pp.15-34

・揚妻祐樹「肉声の語り 尾崎紅葉『伽羅枕』における「発話」「心話」「地」の処理」『藤女子大学国文学雑誌』, 査読無, 95, 2016 年, pp.1-15

・揚妻祐樹「尾崎紅葉の文章観 隠形と顕形の狭間で」『藤女子大学国文学雑誌』, 査読無, 94, 2016 年, pp.1-17

・矢島正浩「〔書評〕高田博行他編著『歴史社会言語学入門』大修館書店 2015」『社会言語科学会』, 査読無, 第 18 巻第 2 号, 2016 年, pp.73-75

・揚妻祐樹「『普通文章論』に見る幸田露伴の文章観」『藤女子大学国文学雑誌』, 査読無, 93, 2015 年, pp.19-35

〔学会発表〕(計 8 件)

・矢島正浩「近代日本語資料としての落語」テーマセッション『日本語歴史コーパス』のフロンティア, 「通時コーパス」シンポジウム 2018, 2018 年, 国立国語研究所(東京都立川市)

・矢島正浩「近世・近世日本語資料が映す東西差 逆接確定辞による接続詞・終助詞の用法の発達をめぐって」方言文法研究会, 2018 年, 関西大学(大阪府大阪市)

・矢島正浩「近代話し言葉資料における接続詞的用法 東西の選好性の相違に着目して」方言文法研究会, 2017 年, 関西大学(大阪府吹田市)

・矢島正浩「近代日本語の諸文体と疑問文の用法との関係」日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究共同研究発表会(第 8 回) 2015 年, 国立国語研究所(東京都立川市)

・矢島正浩「否定疑問文の検討を通じて考える近世語研究の方法」文法史研究会研究発表会, 2015 年, Time Office 名駅(愛知県名古屋市中区)

・矢島正浩「否定疑問文の用法から見た近世語」日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究共同研究発表会(第 6 回), 2015 年, 国立国語研究所(東京都立川市)

・矢島正浩「順接条件表現の周辺の用法を担う形式語の発達と日本語史」第 8 回形式語研究会, 2014 年, 国立国語研究所(東京都立川市)

・矢島正浩「条件表現の使用から見た大正～昭和前期演説・講演資料」『多角的アプロ

ーチによる現代日本語の動態の解明」サブ・プロジェクト第 3 回研究会, 2014 年, 国立国語研究所(東京都立川市)

〔図書〕(計 12 件)

・金澤裕之・矢島正浩共編, 矢島正浩ほか 13 名執筆, 笠間書院, 「近代落語資料における順接条件系の接続詞的用法について」『SP 盤レコードが拓く近代日本語研究』(印刷中)

・金澤裕之・矢島正浩共編, 揚妻祐樹ほか 13 名執筆, 笠間書院, 「文体面から見た偶然確定条件の諸相 落語 SP レコード・『夢酔独言』・尾崎紅葉の言文一致体小説を中心に」『SP 盤落語レコードが拓く日本語研究』(印刷中)

・山崎誠・藤田保幸編, 矢島正浩ほか 29 名執筆, 和泉書院, 「逆接確定辞を含む接続詞的用法の歴史」『形式語研究の現在』2018 年, 593 頁(57-74)

・山崎誠・藤田保幸編, 揚妻祐樹ほか 29 名執筆, 和泉書院, 「時代小説におけるノデアッタ・ノダッタ」『形式語研究の現在』2018 年, 593 頁(337-355)

・有田節子編, 矢島正浩ほか 8 名執筆, くろしお出版, 「中央語におけるナラバ節の用法変化」『日本語条件文の諸相 地理的変異と歴史的变化』2017 年, 245 頁(115-138)

・大木一夫編, 矢島正浩ほか 12 名執筆, ひつじ書房, 「否定疑問の検討を通じて考える近世語文法史研究」『日本語史叙述の方法』, 2016 年, 325 頁(187-213)

・中山緑朗他監修・沖森卓也他編, 矢島正浩ほか 9 名執筆, 明治書院, 「接続助詞」『品詞別学校文法講座』5 巻, 2016 年, 308 頁(106-140)

・相澤正夫・金澤裕之編, 矢島正浩ほか 11 名執筆, 笠間書院, 「条件表現の用法から見た近代演説の文体」『SP 盤演説レコードが拓く日本語研究』2016 年, 299 頁(194-222)

・沖森卓也・山本慎吾編著, 揚妻祐樹ほか 5 名執筆, 朝倉書店, 「文法と文章」『日本語ライブラリー文章と文体』2015 年, 153 頁(34-61)

・青木博史・小柳智一・高山善行編, 矢島正浩ほか 12 名執筆, ひつじ書房, 「【テーマ解説】条件表現」『日本語文法史研究 2』2014 年, 288 頁(233-244)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

矢島 正浩 (YAJIMA, Masahiro)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号: 00230201

### (2) 研究分担者

揚妻 祐樹 (AGETSUMA, Yuki)

藤女子大学・文学部・教授

研究者番号: 40231857